北野文書 ⑩「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（42）明治廿四年十一月六日　朝会長公御令閨歯痛」（66 オ）
　さあ〳〵尋る事情よのきやあろまひ　一ツにハだん〳〵いかなる事　よふきゝとつて　一ツのりを心にをさめば　がんづくといふ　もふこれぜん〳〵いく𠀋のさとし　だん〳〵のりをさとしてある　これから一ツの事情　今ハ一寸さしづしておくなんどき刻限はなしするやらしれん　まあ一寸のさしづしてをく　めん〳〵それ〳〵」（66 ウ）
うち〳〵いかなるをさめかたたより　たよりたよりのりハあろふまい　大工一ツのりをさとしてある　さしづをもつてはこぶ　まちこふたりをさとすがよふきゝわけ　おや一ツのりとゆふ　きくハみづ〳〵　一寸にも一ツの心のりにもたづ　はたの事これ第一ほこり　だん〳〵とふくほどすむ　ちかくハにごるどふもミてい」（67 オ）
られん　さあ〳〵一ツの尋ねさしづ　事情ハまちがわん　めん〳〵よりの心のりにより　まちごふのや　きのわるい事ゆふと　をもへばそのまゝそふゆへ　いかなる事もミなみているでどんな事も　をれハそんな事きかんといへば　それまで　はやくつたへてくれるよふ
（注）出だしのところ「よのき」は「余の儀」の意。

（43）仝日朝梶本様葬祭来ル十二日」（67 ウ）
挙行の御願
　さあ〳〵尋ねにやならん　尋ねて一ツきいて　にち〳〵といへばどんな事もをさまる　一寸ミればかわいそふなものや　なんでやろ　せけんたがい〳〵それ〳〵をもふ　あと〳〵くわしくさとする　今尋る事情　心のりをもたづ　ほつてをけとわゆわん処　そふ身分そふのりによ」（68 オ）
りてはこんでくれ　あと〳〵のりををもへば　せけんのぎりハいらん処　そふ身分そふにはかろふてくれ
　日限の義御願
　それハなんどきなりと　それわゆるす

（44）仝九日午前九時半会長公身上御願
　さあ〳〵いかなる事〳〵　尋る」（68 ウ）
事情ハこれ一ツの事情　どふゆふ事　身上〳〵一ツ尋る処　いかなる処　尋る処身の処　尋ねにやならんとゆふハ　いかなる事　これまてさつぱりしらん　これからの道ハむつかしいてならん　これむつかしいによつて　これまでいく𠀋だん〳〵　刻限の事情にもさとしたる　たいてい〳〵の道ハとふれども　一ツわ」（69 オ）
からん　しらず〳〵の中　これまではやく〳〵のりがいそぐ〳〵　よふ事情きゝわけ　もふこれから　なにもをもう事もなけねバ　ゆふ事もなひ　道を道ときゝわけるなら　身上からミてみて　一ツきいて　一ツのりをおさめねバをさまらん　をくれてならん　どふで心にハはまろまひ　なれど神屋敷のりをきゝわけるなら　わ」（69 ウ）
かるやろ
　引続き
　さあ〳〵やい〳〵〳〵〳〵　これ〳〵〳〵　さあ〳〵〳〵やい〳〵〳〵〳〵　みな〳〵　さあ〳〵つれてかへりたで　やい〳〵〳〵きいてくれ〳〵〳〵　これ〳〵〳〵きいてくれ〳〵〳〵　ミてくれ〳〵　ウゝゝ――　もふ〳〵〳〵〳〵　さあ〳〵もふ〳〵　しらず〳〵やつたわいな」（70 オ）
ざんねんな事や〳〵〳〵　そふであつたか〳〵　さあ〳〵今のざまをみてくれ〳〵　さあ〳〵あちらなりこちらなり　こちらなりたのむねよ〳〵〳〵〳〵　たのむわよ〳〵　さあ〳〵あと〳〵きをつけよ　今一ツものがたり　萬々事情をもつてかくれたる　ゆふまでやあろまひ　すうきり〳〵〳〵〳〵と」（70 ウ）
　引続ひて刻限
　さあ〳〵ウゝゝ――　さあ〳〵刻限〳〵をもつてはなしかけたる　刻限をもつてはなしかけたる　是迄といふわ　ながいどふ中いかなる道　代々の事情〳〵　これまで〳〵事情をはなしかける　どふゆふ事情をはなしかける　よくきゝわけにやならん　第一事」（71 オ）
情のりをきかそ　一寸にハふでさきにも　つくれよふまひ　身上のりと刻限のりと心のり　第一　事情身上一条から事情たちかけるなら　いかなるりもをさまるやろ　ミんな世上といふりをもい　はこぶ処のりをおもい　めん〳〵ちきいとろか　をもい〳〵の心　これまでなんど　くときはなし　いかなる心のりといふハ　たゝ一時のり」（71 ウ）
がわからんから　ぜひ〳〵の道をとふりきたる　めん〳〵いかなる　是わこふしていれば代々の道ハをさめにやならん　むつかしい事やなひ　はじめかけた道　しらづ〳〵の道　ほのかの処よりはじまりた道　ふでにいろ〳〵つくしたる事情はなしこれから神一条のり　世界のり　どふゆふ事さだめながら　さが」（72 オ）
さにやわからん道やあろふまひ　わからんから尋ねる　尋ねるからさとしよ　さとしたとふりの道をとふるなら　神の道何ヶ年　めん〳〵さつしたるはなし　是迄しらず〳〵の道やあろふまひ　どんな事情があれど　ミんなつれてかへる事情　しんはしらといへバ一戸しきのものなら　世界のりからミれバ一戸一ツのりにとまる　なれど」（72 ウ）
神やしき　神一条の道　身の処　心さんらんさそふとゆふよふな　りではじめた道か　日々事情ゆわず〳〵のりハあろまひかたらず〳〵のりハあろまひ　世上からあつめてとりつぎとゆふ　とりつぎならはなさにやなろふまひ　神一条の事情なら神一条の道がなけにやなろふまい　是迄よき事ゆへばよき事あ」（73 オ）
しきのものわけづ　めん〳〵心といふ事情　神一条のしはいといふ　何度の事情もさとしをいたる　世上よりくる　これからをれといふ　めん〳〵心のりをもたづ　さとする道をはやく是迄きゝそこなひ　とりそこないやあろまい　めん心とゆふり　だん〳〵一時の身上からきゝわけて　ぜん〳〵なさけのりをかんがへ　これよりハ内〳〵」（73 ウ）
すうきりをもわんかまわん　それ〳〵よせる取次といふ道の処

はやく心をよせ　いかなる処もをさめ　十分たいそふ　又々内々へもさとしてくれ　神屋敷とゆへば神とゆう　神とゆへば人間のりでハあろまひ　尋ねバきこゑんやあろまひ　一時はやくさだめてくれねバならん　うつとしいてならん　これハたれ〳〵」（74オ）

とハさとされん　ひろく〳〵の心といふ　めん〳〵ハこふとゆふりハ　さら〳〵もたず　あちらがかわる　こちらがかわるよふでハ　一ツの心とハゆへよふまい　すつきりあらためかへ千里ひとまたげとゆふ　さあ〳〵事情はやくといふ

（注）「めん〳〵ちきいところ」（71ウ）の「ちきい」は「大きい」の誤写、あるいは種本の間違いか。おそらく「大」が崩れて「ち」と読み取ったのか。また「是わこふしていれば」（72オ）の個所は正冊によれば「俺は」となっている。この誤植は、種となった写本の誤りと考えられる。なお「めん心」（74ウ）は正冊によれば「〳〵」が抜けている。すなわち「めん〳〵心」となる。この「引続ひての刻限」は「伺いのさしづ」が途中から「刻限さしづ」に変化したもの。正冊と比較すると、細かいところで相違しているところが目立つ。

（45）明治廿四年十一月十五日夜一時十五分　御本席様身上ヨリ御願

さあ〳〵〳〵〳〵　ウゝゝ――　ア――ア――」（74ウ）

ウ〳〵ア〳〵　さあ〳〵〳〵〳〵　咄しや〳〵〳〵〳〵　さあ〳〵〳〵〳〵　どれからはなそ　なにからはなそ〳〵〳〵　まあ〳〵〳〵だん〳〵〳〵　さあ〳〵いかなる事〳〵　どふゆふ事も　さつぱりあらいきる　すつきりあらいきる　あらいきつてたてかへる　あらいきらんけれバどふもならん　いつ〳〵までもごもくやほこりだら」（75オ）

けや　すつきりあらいきる　これより一ツひらけたとゆふハ　どふもうけとりにくい　あらいきらねバ　どふしてもこふしても　うけとる事でけん　たいて〳〵〳〵ハみのがし　しばらくわみゆるしてきた　これからミゆるす事ハでけん　心にりがなくば　いくどもゆふてもわからん　身上からさしづ　一寸さしづがよかつたなあ　さしづ」（75ウ）

がきにくわなんだとゆふ　その場だけ　さあむつかしい事ハゆわん　はやいりにさとす　まあきよこふとをもふた　だん〳〵道をさとす　うとしいよふでハどふもならん　はなしや〳〵　刻限や〳〵やといふても　はんだんをつけんならんよふでハどふもならん　さとしさとりでハどふもならん　こくげんの」（76オ）

はなしよふきゝとれ　口中にふくむり　これからといふハ　うつとしいなあといゑば　うつとしいなる　あきらかならあきらかなる　なにももんかたもなひ処から　つたわつてきた道　刻限のはなし　うそがあるかよふきゝとれ　神屋敷　地場といふ　とりそこなひしてハどふもならん　あきらかすつきりそふじ　そふじ」（76ウ）

するにハはなしせねバならん　このくらひはこび　これくらいつくしているのに　そふじなんでやろふとをもふ　よそのほこりハミへて　うち〳〵のほこりがミへん　とふくわあきらかちかくわうつとしい　あしもとがにごる　身の内からかりもの〳〵ときいた時だけ　一日たち十日たち　ゆふているまに二十日たち　ついにわ」（77オ）

わすれる　一寸ほふけをもつて　そふじするよふなもの　はじめハすこしのほこりでも　そふじするなれども　もふほうけハいらんといふ　さあつもる〳〵　ごもくばすつきりきらい　あきらかなら心にしんぱい　はいするとゆふハ　心にくもりあるから　きよの日ハあすびにゆく　てんきとゆへばけんこふ　あたへも」（77ウ）

十分とゆへばたのしミやろ　なれどさあでよふとすれバ　あたゑハすくなし　うつとしい　風がふく　さあたのしミとなるか　よふきゝわけ　かわいからくどきはなしやで　しつかりきゝとれ　これゆへばどふやろ　これゆへバはへりにくい　でにくいとゆふよふでハしんのよりきよだいとゆへるか　ゑんりよきがね　人間のぎ」（78オ）

りをやむハ一のほこり　あつきともゆふ　さあすつきりそふじ　あきらかならば　とんな雨風でもこわいをそろしい日ハなひ　すつきりはいた処にいれば　こわいをそろしい日ハなひ　すつきりそふじをしてをけ　ゑんりよきかねハいらん　すつきりいらん　ゑんりよきがねありてハどふもならん　ゑんりよきかね」（78ウ）

ありてハどふもならん　ゑんりよきかねあつてハしんのきよだいとゆへるか　たがい〳〵のうたがいわ神のりやなひ　此屋敷神屋敷とゆふ　どのよふにもゆふ　ミなつたへるよふ　すつきりそふじができねバ　よるりハなひ　たいてな道ハといてある　そこで二度三度五度六度七度までハ　もふであろうか〳〵とみのがして」（79オ）

ある　すうきりそふじできんよふでハ　はらうまでやなひ　めん〳〵よりはらわれるりをこしらへるのやで　さあ〳〵あめかぜ　一時の間のたゝかへで　どふであつた　火の中いかなる中もこわい　をそろしいとゆふりハなひ　めん〳〵日〳〵つくす　それそををゝのこふのふのりハ　みなそれ〳〵かやす　日々のほこりをはら」（79ウ）

ゑばきれいなもの　ごもく〳〵あめがふれバながれ　風がふけばあとへかへり　どふもならん　めん〳〵ミな身上にりがある　よくきゝわけ　子共といふ　親といふ　親ハしんぼふして　このものがかずなひものや　のこしてやろとゆふがをやのり　上とゆへバ上　あるとゆへバある　おやとゆへば親のり　しつかりきいてくれ　わからん」（80オ）

事ハたづねてくれ　又々席の上これだけはなしておこふ

（注）この明治24年11月15日という日は、教会事情が南海、高知、笠岡の3件。身上願が前川菊太郎、高井猶吉、松村吉太郎、山田作治郎、中台平次郎妻いそ、桝井伊三郎小人つゆの6名があり、その上での「本席御身上より願」がある。教史の上から、少し注意を払っておきたい。